# 見える産研、選ばれる産研、頼られる産研へ

巻頭言

永　井　健　治*

Toward a More Visible, Chosen, and Trusted SANKEN

Key Words: SANKEN, Under One Roof, Societal Challenges, Research Hub, Open Innovation

## 産研という場所

産業科学研究所、すなわち産研は、1939年に大阪帝国大学に設立されて以来、86年にわたり「産業に必要な自然科学の基礎学理とその応用」を追究し、学術の発展と社会課題の解決に貢献してきた。私は2012年に産研に着任し、研究者として、また副所長として、歴代所長のもとで産研の歩みを間近に見てきた。その経験を通じて強く感じるのは、産研とは、変化を恐れず、新しい学問と技術を生み出し続ける場所であるということである。

産研の最大の特徴は、「Under one roof」の精神にある。材料、情報、量子、ナノテクノロジー、ビーム科学、分子科学、生命科学など、多様な分野の研究者が一つ屋根の下に集う。ときにその多様性は、方向性が見えにくいという印象を与えるかもしれない。しかし私は、それこそが産研の最大の可能性であると考えている。社会課題が複雑化し、一つの専門分野だけでは解決できない時代において、異なる知が近接して存在することは、かけがえのない強みである。

いま大阪大学は、大きな変革の時期を迎えている。学術研究機構や教育機構の新設をはじめ、大学全体の構造が再編されようとしている。その中で産研が果たすべき役割は何か。私は、産研を「見える産研、選ばれる産研、頼られる産研」へと進化させたい。優れた研究成果を生み出すだけでなく、社会が何を必要としているのかを的確に捉え、産官学民の多様なステークホルダーとともに、優先的に解決すべき課題を発掘し、その解決に向けた研究と社会実装を推進する研究所でありたい。

そのためには、産研を内に閉じた研究所ではなく、社会と双方向につながる「プラットフォーム型研究所」として発展させることが重要である。産研は、北海道大学、東北大学、東京科学大学、大阪大学、九州大学の五つの附置研究所から成るネットワーク型共同利用・共同研究拠点「物質・デバイス領域共同研究拠点」の拠点本部でもある。この全国ネットワークを活かし、研究者コミュニティ、企業、行政、市民社会から寄せられる知見や期待を集約し、新たな共同研究や社会実装へとつなげるハブとしての機能をさらに高めていきたい。

同時に、産研の内側にも、分野を越えた出会いを生み出す仕組みが必要である。異分野共同研究は、重要性を説くだけでは始まらない。研究者同士が自然に顔を合わせ、互いの問題意識や技術を知り、「一緒に何かできるかもしれない」と感じる機会が不可欠である。そのために、サークルやサロンのような小さな集まりを数多く設け、教員、技術職員、事務職員、学生が垣根を越えて集う場を増やしたい。いわば、共同研究が立ち上がるための活性化エネルギーを下げるのである。

研究成果を社会へ届ける力もまた、これからの産研に欠かせない。優れた研究は、論文として発表されるだけでなく、その意義が社会に理解され、次の連携や実装へとつながって初めて大きな力を持つ。産研協会との連携をさらに深め、企業や市民との対話の場を広げるとともに、研究成果や人材、産学共創の取り組みを積極的に広報発信していきたい。

産研は、長い歴史と伝統を持つ研究所である。しかし伝統とは、過去を守ることだけではなく、未来

* Takeharu NAGAI
1968年生まれ
東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻修了（1998年）
現在、大阪大学産業科学研究所　生体分子機能科学研究分野
所長・教授　博士（医学）
TEL：06-6879-8480
E-mail: ng1@sanken.osaka-u.ac.jp

に向けて変わり続ける力でもある。多様な知が出会い、社会とつながり、新しい価値を生み出す場所。皆がそこで仕事をしたいと感じ、社会から頼られる研究所。そのような産研をつくることが、これからの私の責務であり、覚悟である。